

○手嶋康人・衛本静枝
(大分農林水産研指農研)

【目的】

大分県では、夏冬2作型を組み合わせるニラの周年栽培を行っている。ニラの周年安定生産のためには、低温期の連続収穫，多収技術が求められている。そこで、冬ニラ栽培における株養成中の低温遭遇時間及び加温の有無が低温期の伸長性，収量に及ぼす影響について県内主力品種である‘タフボーイ’及び‘スーパーグリーンベルト’を用いて検討した。

【材料および方法】

2010年5月10日に播種しセルトレイで育苗した‘タフボーイ’，‘スーパーグリーンベルト’を7月26日に1/2000aワグネルポット1鉢当たり3本定植し，露地条件下で株養成を行った。0時間区は外気温が5℃を下回る前の10月15日に1回目の刈り取りを行った。その後，外気温5℃以下の時間を積算し，100時間区は11月29日，200時間区は12月14日に1回目の刈り取りを行った。1回目収穫後，無加温区はPOフィルムを展張したハウス内で，加温区は温風暖房機を設置したハウス内で最低気温を5℃以上に保つように管理し，各区とも2011年3月末まで収穫を行った。

【結果および考察】

1) 無加温区の最低気温は11月4日から5℃を下回り，11月上旬から2月中旬までの旬平均最低気温は7℃以下となった。加温区と無加温区の最低気温の差は1月が6～8℃と最も大きかった(データ略)。
2) 無加温での収穫回数は0時間区では‘タフボーイ’5回，‘スーパーグリーンベルト’4回，100時間区では両品種ともに3回，200時間区では‘タフボーイ’3回，‘スーパーグリーンベルト’2回の収穫となった。両品種とも0時間区が多収となった。低温遭遇時間に関わらず‘タフボーイ’が‘スーパーグリーンベルト’より多収となった。
3) 加温による収穫間隔の短縮効果は見られなかった(表1)。1月以降，加温区は葉数が多く葉幅が大きくなったが，葉長は無加温区より短かかった(データ略)。加温区は収穫前低温遭遇時間に関わらず2月以降多収となり，合計収量は加温区が無加温

区を上回った(図1)。

以上のことから，冬ニラ栽培では‘タフボーイ’が‘スーパーグリーンベルト’に比べ低温期の伸長性に優れ多収となった。両品種ともに株養成中に5℃以下の低温に遭遇させずに収穫開始することにより100時間以上遭遇させたものに比べ3月末までの収量が多くなった。また，収穫中のハウス内気温を5℃以上に保つことで無加温区に比べ2月以降の収量が増加した。

表1 収穫日及び収穫間隔

区	品種	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	
0時間	無加温	タフボーイ	10月15日	11月16日	1月11日	2月18日	3月14日
				32	56	38	24
	スーパーグリーンベルト	10月15日	12月10日	2月14日	3月7日		
			56	66	21		
100時間	無加温	タフボーイ	10月15日	11月16日	1月11日	2月25日	3月25日
				32	56	45	28
	スーパーグリーンベルト	11月30日	1月1日	2月23日	3月24日		
		(刈捨て)	32	53	29		
200時間	無加温	タフボーイ	11月29日	2月1日	3月2日	3月28日	
		(刈捨て)	64	29	26		
	スーパーグリーンベルト	11月30日	1月7日	2月28日	3月22日		
		(刈捨て)	38	52	22		
200時間	無加温	タフボーイ	12月14日	1月20日	2月16日	3月14日	
		(刈捨て)	37	27	26		
	スーパーグリーンベルト	12月14日	2月15日	3月7日			
		(刈捨て)	63	20			
加温	タフボーイ	12月14日	1月28日	2月24日	3月22日		
	(刈捨て)	45	27	26			

* 上段：収穫日，下段：収穫間隔

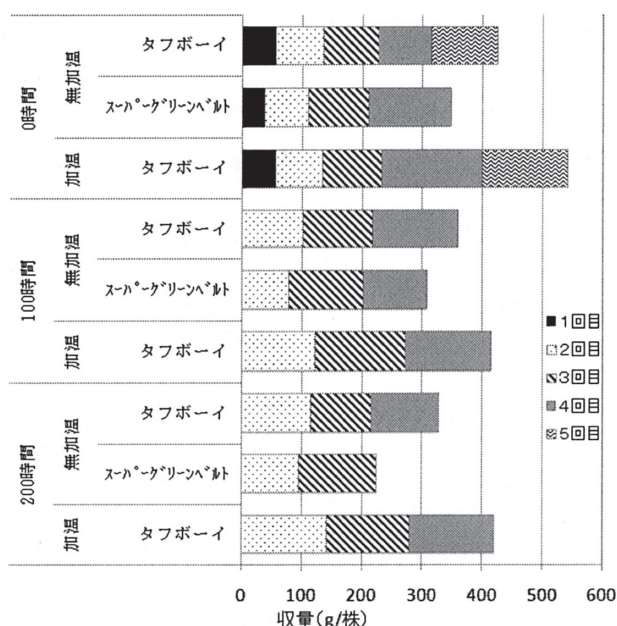


図1 低温遭遇時間及び加温の有無がニラの収量に及ぼす影響